

だっせいぎょ りしやういん  
 獺祭魚と李商隱

飄

々

広報委員

吉岡 達生

獺祭魚は、略して獺祭ともいう。まず獺祭魚のそもそもの意味を述べたい。中国では、獺が捕らえた魚を、食べる前に岸上に羅列する、ちょうど神に供して祭るように見えるので、獺祭魚という。

出典の一つに、『礼記』月令篇がある。「孟春之月、東風解凍、蟄蟲始振、魚上冰、獺祭魚、鴻雁来」（孟春の月に、東風 凍りを解かす、蟄蟲始めて振るう、魚 氷に上ぼる、獺 魚を祭る、鴻雁 かえる）とある。

旧暦一月の節気「立春」になると、順番に、東風（春風）が吹いて氷を解かし、冬眠中の動物（蟄蟲）が動きはじめ、水底に潜んでいた魚が水面に近づき氷を背にする時期がくる。旧暦一月の中気「雨水」になると、順に、獺が捕らえた魚を岸辺に並べて祭り、鴻雁が北に帰（り、草木が萌えはじめ）る。

中国の伝統的な季節感をあらわすものに、七十二候がある。旧暦（陰暦）で自然現象に基づく七十二の季節の区分である。五日を一候、三候を一気、二気・六候を一か月とする。二十四気・七十二候を一年とする。二十四気は、二十四節気ともいう。いま引用した『礼記』の「①東風解凍、②蟄蟲始振、③魚上冰、④獺祭魚、⑤鴻雁来」は、順番に年初の五つの候である。六番目の⑥草木萌動（草木が萌えはじめる）をくわえて、旧暦一月の二つの気と六つの候のすべてということになる。

つぎに獺祭魚の転義をみたい。晩唐の詩人・李商隱（812～858）には、「夕陽 無限に好し」の「楽遊原」や『唐詩選』に入っている「夜雨 北に

寄す」など有名な漢詩がある。李商隱には、獺祭魚という号があるが、あまり知られていない。その出典は、宋の楊億（974～1020）の雑話を載せる『談苑』である。そこには「李商隱為文、多檢閱書冊、左右鱗次、号獺祭魚」（李商隱 文を為るとき、多く書冊を檢閲し、左右に鱗次して、獺祭魚と号す）という一文がある。李商隱は文をつくる時、書籍をよく調べ、左右に魚の鱗のように連なり並べて、獺祭魚と号す。

この場合の意味は、原義から転じて、①詩文を作るとき数多くの参考書を座の左右に並べひろげること、さらに転じて、②詩文を作るのに多くの典故を引くことである。また、日本では正岡子規の別号「獺祭書屋主人」がある。書齋で自分の周囲に参考図書を積み重ねたことからである。

なお、李商隱の詩注には、高橋和巳『中国詩人選集』第十五卷（岩波書店、1958）がある。私の李商隱についての理解・知識は、この書籍による。高橋和巳（1931～1971）は吉川幸次郎の門下で、もと京都大学助教授（中国文学）である。大学紛争の時に、学生の主張が正しいとして辞表を出し、作家生活に専念した。主著に『悲の器』『憂鬱なる党派』『邪宗門』『我が心は石にあらず』『わが解体』などがあり、一時はベストセラー作家だった。